

Prinz,
The Emotional Construction of Morals,
Chp1. Emotionism

発表者: 佐藤 亮司 (科哲D1)

- ▶ この章の概要
- ▶ 前半
 - 様々な感情主義(とそうではない立場)の間の比較
- ▶ 後半
 - その中で強い感情主義の擁護、特に認識論的側面の擁護

目次

- ◎ 1.1 情緒的な道徳性(Affective Morality)
 - 1.1.1 二種類の感情主義(emotionism)
 - 1.1.2 本質的關係
 - 1.1.3 強い感情主義
- ◎ 1.2 感情主義は正しいだろうか
 - 1.2.1 道徳的判斷は感情を伴っている
 - 1.2.2 感情は道徳的判斷に影響する
 - 1.2.3 びっくりぎょうてん(Dumbfounding)
 - 1.2.4 道徳的発達
 - 1.2.5 道徳版メアリー
 - 1.2.6 サイコパス
 - 1.2.7 道徳の不統一性
 - 1.2.8 感情主義の概要

1.1 情緒的な道徳性(Affective Morality)

- ▶ 1.1.1 二種類の感情主義(emotionism)
- ▶ 正しさや正しくなさ(wrongness)は私たちの感じるものであるが、感情が道徳を構成するかどうかについては疑うことができる
- ▶ 感情主義(emotionism): 感情が道徳にとって何らかの意味で本質的であると考える立場
 - その中の一つである情動主義(emotivism)と区別せよ

形而上学的感情主義

- ▶ 道徳的性質は必然的に感情に関わっている
- ▶ 道徳的事実があるとすると、この立場は道徳実在論にコミットしている
- ▶ 古典的功利主義 (Bentham, Mill)
 - 善 = 功利を最大化 = 幸福を最大化、幸福 = 感情
- ▶ 感覚可能性説 (Darwell, McDowell, Wiggins)
 - 道徳的性質と第二次的性質とのアナロジー
 - 内在的実在論 (⇔ 外在的実在論)
 - aがFであることは、aをFとみなすことに依存する
 - 道徳的性質は実在するが関係的性質である (われわれにある感情を引き起こすという性質)

認識論的感情主義

- ◎ 道德**概念**は必然的に感情に結びついている
 - 道德概念によって我々は道徳的事実を認識する
 - ⇒ 道德概念が感情に何らかの形で関係すると考えるのは妥当
 - ◎① 道德概念は感情**概念**に関わる ⇒ 例えば古典的功利主義
 - ◎② 道德概念は感情**そのもの**に関わる ⇒ 認識論的感情主義
- ◎ 標準的な方法による道德概念の所有
 - 感情を本質的に含むのが標準的な道德概念
 - しかし、その他の道德概念があることを否定しない
 - ◎例) 盲人の色概念(非標準的)と晴眼者の色概念(標準的)

認識論的感情主義

- ▶ 表明説Expressivism(Blackburn)
 - 道徳的事実は判断は投影的⇔道徳的事実は世界内にあるように見えるだけだが、実際には存在しない
- ▶ 規範表明説norm Expressivism(Gibbard)
 - 道徳的判断＝感情の適切さについての規範の受容
 - 私が盗んだら罪の意識を感じるということを命令する規範の受容
 - 感情は言及されているが使用はされていないので、厳密には認識論的感情主義ではない

認識論的感情主義

- ▶ 情動主義(Ayer, Stevenson)
 - × 形而上学的感情主義
 - ○ 認識論的感情主義
 - 道徳的判断は世界を記述していない、われわれの態度を表現しているだけであり真偽を問えない

感情主義と行動

- ◎ 感情は動機(motivation)の強さに影響
- ◎ 感情と動機の強い結びつきをしめす証拠
 - 無動無言症akinetik mutism (Damasio, Van Hoesen)
 - 罪が手助けを促進する(McMillen, Austin)
- ◎ 動機内在主義
 - 道徳的判断とそれに従って行動する動機との間に必然的関係がある
 - 道徳的判断はそれ自身で動機を強くする
- ◎ 認識論的感情主義は動機内在主義を帰結するだろう

1.1.2 必然的関係

- ▶ 道徳と感情は必然的に関係しているが、道徳と感情が常に共にあるというわけではない
- ▶ ①弱い意味での必然的関係
 - 本質を恒常的性質群として定義(Boyd, 1988)
 - 一連の性質が共起する傾向にあり、お互いの共起を促進する
 - cf)強い意味での本質的關係:あるカテゴリに属するための必要十分条件としての本質(クリプキ的)

1.1.2 本質的關係

- ▶ ② 道德概念と感情との關係が傾向的
 - 道德概念と感情の傾向性との關係が強い意味で必然的
 - 感情の傾向性と感情との關係が強い意味で必然的
 - ∴ 道德概念と感情との關係が強い意味で必然的
- ▶ ⇒ 強い意味で必然的な關係であっても、概念が傾向性によって構成されているのであれば共に例化されていなくてもよい

1.1.3 強い感情主義

▶ 感情主義(と非感情主義)の種類

	感覚能力説	情動主義	古典的功利主義	カント的倫理
形而上学的主義感情	YES	NO	YES	NO
認識論的感情主義	YES	YES	NO	NO

カント的倫理(非感情主義的)

◎ 認識論的感情主義の拒否

- 悪い行動とは普遍的な法則として望むことができないようなもの⇒感情とは無関係
- 普遍化可能性は道徳における理性の要求
- 普遍化の例)約束は、約束が一般的に信頼でき、正直であるという背景のもとでのみ意味をなすので、もしもみな約束のときに嘘をついたら約束の全体の構成が壊れる⇒嘘についてはならぬ

◎ 形而上学的感情主義の拒否

- なにかを正しい(誤っている)と概念化することは何が理性的なことなのかについての判断を下すこと

強い感情主義の擁護

- ▶ (S1) 形而上学的テーゼ
 - ある行動は、ある条件のもとで正常な観察者に承認 approbation の感情を引き起こすときにのみ、倫理的に正しいという性質をもつ
- ▶ (S2) 認識論的テーゼ
 - S1 で言及された感情を感じる傾向性は正しい(間違い)の概念の所有条件である
- ▶ Prinz はどちらも肯定的にとらえる強い感情主義を擁護する

1.2 感情主義は正しいだろうか

- ▶ 認識論的感情主義についての証拠に焦点をしぼり、
- ▶ 形而上学的テーゼについてのサポートをいくつか提供する

1.2.1 道徳的判断は感情を伴っている

- ▶ 道徳判断はしばしば感情を伴っている
 - 例)新聞で、子供のいじめ、戦争の残虐行為、組織的な人種差別等々の話を読んだとき
 - 感情の強さはしばしば道徳的判断の強さの信頼できる導きとなる

- ▶ 道徳判断における感情の影響は我々が悪い行動を避けようとするという事実から明らか
 - 悪いことをするのは我々を悪い気分にする
 - 例) Milgramの実験

道徳的判断をなすときに、感情が起こる という経験的な証拠

- ▶ 神経科学的成果(ニューロイメージング研究)
 - Greene and Haidt(2002), Heekeren(2003), Moll et al.(2003), Moll et al.(2002), Sanfey et al. (2003)ultimatum game, Singer et al.(2006),Bethoz(2002)
- ▶ これらの成果において活動が見られた部位
 - 島Insula, 前帯状皮質anterior cingulate cortex, 側頭極temporal pole, 内側前頭回medial frontal gyrus, 眼窩前頭皮質orbitofrontal cortex
 - ⇒感情研究で通常でてくる部位

道徳判断と感情の関係についての二つのモデル

▶ 因果モデル

- 道徳判断は感情を引き起こすが、構成されてはいない
- 道徳判断は感情に先だって起こる

▶ 構成モデル

- 道徳概念は感情をその部品として持つ
- 構成モデルを支持するさらなる証拠を見る

1.2.2 感情は道徳的判断に影響する

- ▶ 感情が道徳的判断に影響を与えて、適切な道徳的判断を促進することを示す⇒構成モデルの支持
- ▶ トロリー問題：トロリーが線路の上にいる五人のところへ突き進んでいる。五人を助けるために・・・
- ▶ シナリオ①
 - 橋の上にいる男性を線路に突き落として、トロリーを止める。
 - 五人は助かるが、男性は死んでしまう。

トロリー問題についての説明

▶ この判断についての説明

- ①(哲学的)殺人は、人を死ぬにまかせることよりも悪い
- ②(心理学的)殺人は強い感情を引き起こす
- ①と②は整合的

▶ 予測

- ①道徳ジレンマを考察するとき感情がオンラインになる
- ②何が正しいかについての直観はシナリオについての感情の内容の変化によって影響を受ける

Greeneの仮説

- ▶ Greene et al. (2001)はf-MRIを使ってトロリー問題を考えている被験者の脳を調べた結果
 - ⇒感情を司る部位の活性化

- ▶ Greeneの仮説: 道徳の推論には、理性的プロセスと感情的なプロセスによって駆動されている

Prinzの仮説

- ◎ Prinzの仮説：感情と感情が対抗している。より強い感情を持つルールが勝つ

- ◎ Prinzの仮説から予測される実験
 - レバーが、死んでしまう人のいる線路のそばにあるとする
 - 管制塔から橋の上の人を落とすトラップを作動させる
 - ⇒ 直観が変わるのではないか

道徳的概念と義務論、帰結主義

- ▶ シナリオ①を拒否する人は、義務論的な判断をしていることになる
 - 普遍的法則「人間を手段として用いてはならない」
- ▶ トロリーが村に突き進んでいて、五百人殺してしまう場合は、人を突き落としてもよいように思われる
 - ⇒ 義務論から帰結主義に転向してしまったことになる
- ▶ 善の概念は承認の強い感情を引き起こすものの概念であると考えよ

認識論的感情主義を支持する経験的証拠

◎ 感情の誘導

- 道德概念が感情的部品を含むならば、感情の誘発は道徳的判断に影響を与える
- Wheatley and Haidts(2005)
 - “take” “often”といった単語を聞くと嫌悪の感覚を抱くように被験者を催眠にかける
 - “take” “often”といった単語を含む話の倫理的評価が悪くなる
- 他に、Schnall et al.(2005), Lerner et al.(1998) Fogas and Bower(1987), Dion et al.(1972), Darby and Jeffers(1988)

- ◎ 認識論的感情主義は、決定的ではないがデータを最もよく説明する

1.2.3 びっくりぎょうてん (Dumbfounding)

- ▶ これまでで感情は道徳に影響を与えることを示した
- ▶ もっと強い主張：道徳的態度をもつこと \Leftrightarrow 感情の傾向性を持つことである
 - 理性的判断無しでも道徳的態度を持てる
 - 反省的な道徳的判断は、感情的な基礎を持っている
 - \Rightarrow 経験的成果による支持

あぜん(Dumbfounding)

- ◎ 人々に、なぜ特定の道徳的見解を持っているのかを問う
- ◎ ⇒理由をあげる
- ◎ ⇒反駁する
- ◎ ⇒人々の道徳的判断は変わらない

- ◎ Heidtの社会的直観social intuitionist説
 - 感覚(sentiment)を内観することで倫理的判断に到達する
- ◎ Morphy et al.(2000)の合意された近親相姦、カニバリズムについての研究

あぜんの 結果についての複数の解釈

▶ 解釈① 隠された理由説

- ⇒ 十分な注意深い反省によってもその理由に到達できないと考えることは不適切。

▶ 解釈② いつも理性に基づいて道徳的判断を行っているが、理由がしばしば間違っている

- ⇒ 議論が間違っていることに気づいても道徳的判断を翻そうとしないので不適切。

あぜんの 結果についての複数の解釈

- ◎ 解釈③ 実際には近親相姦や肉食を悪いと思っていない
 - ⇒ タブーが人々に定言的に近親相姦や肉食が悪いと言わせるほど強いなら、対応する信念がしみこんでいるはず
- ◎ 解釈④ 道徳的判断についての理由を持ってはいない
 - ⇒ ほとんど正しいが、ミスリーディング
 - ⇒ 「それは単に間違っている」というとき、その価値が基礎的であると暗に語っている
- ◎ 道徳判断は基礎を持っており、基礎的な価値は感情 (passion) が支配している

1.2.4 道徳的発達

- ◎ この描像は道徳的発達における研究に支持されている
- ◎ Kohlberg(1984)の主張:
- ◎ レベル1 前規約的道德(自己中心的)
 - ① 従属と罰に焦点
 - ② 道徳的エージェントであることの利益について考えだす
- ◎ レベル2 規約的道德(集団への適合)
 - ③ 他人からどのように見られるかに焦点
 - ④ 法と秩序に焦点
- ◎ レベル3 ポスト規約的道德
 - ⑤ 法を功利主義的に正当化
 - ⑥ カント的な普遍的道徳原理

道徳的発達と感情

- ⑤と⑥の段階が実際にあるかは疑わしい、④が西洋の先進国では支配的
 - Colby et al.(1983), Snary(1985)
- ①から③のステージは感情と明らかに関係している
- ④のステージも感情と関連するといえる
 - 秩序→それらがなければ社会が崩壊する→社会の崩壊についての感情的反応
 - 法→何かが誤っているということを単に法に訴えて説明する→法は感情に基礎づけられているということを説明する

道徳的発達と感情

- ◎ ほとんどの人がステージ④まで成長するということは感情主義の証拠として解釈できる
 - 法と秩序に訴えるということは、それらを規約とみていることを帰結しない
 - 人々は法と秩序が内在的な価値をもつものとみている
 - ⇒ 規範が感情的に基礎づけられている

- ◎ 二つの経験的予測
 - ① 道徳的成熟は感情の訓練課程によって獲得される
 - ② いわゆる規約的ステージにいる人々は道徳的ルールを単に社会的規約によって支えられているとは思っていない

規約的ルールと道徳的ルール

- ◎ 人々は規約的ルールと道徳的ルールを異なるものとしてみるようになる
 - ⇒ 発達心理学的証拠
- ◎ ① 子どもたちは感情の操作によって道徳的な教育を与えられる(Hoffman 1983, Eisenberg 2000)
 - ◎ 力による断定power assertion, 愛情のひっこめlove withdrawal, 誘導induction
- ◎ ② 通常の子供たちは単なる規約的なルールと道徳的なルールを区別している(Smetana 1981, Turiel 1983, Nucci 2001)
 - ◎ 道徳的、あるいは道徳と関係しないルール違反を見せて、深刻さ、権威に対する依存性、正当化をたずねる
 - ◎ 道徳的なルールの方が深刻で、権威に依存せず、他者の危害に訴えて正当化する傾向にあるという結果⇒感情主義的な説明

規約的ルールと道徳的ルール

- ◎ 道徳的ルールについての質問に対する子供たちの答えは、感情に訴えたものである(Nucci, 2001)
 - 盗みについて考えることで、子供たちは他者の怒りを想像し、彼ら自身が怒る
- ◎ 3歳より少し前に道徳的規則と慣習的規則の違いを理解するようになる
- ◎ もう少し成長すると、悪い行動が他者にもたらす効果を理解するようになる
 - 道徳の違反者は幸せと感じていると思っている
 - 違反者は行為においても態度においても誤っていると考える

1.2.5 道徳版メアリー

- ◎ 反論：確かに道徳能力を獲得するのに感情が中心的な役割を果たしているが、その役割は偶然的ではないのか
- ◎ 道徳版メアリーの思考実験：
 - メアリーは一切の道徳教育を受けずに、生まれつきの道徳的態度ももっていない
 - しかし、KantやMillやその他の規範倫理学についての全てを学習している
- ◎ Xをすることが効用を最大化すると知るとは、Xをすることが道徳的に正しいとメアリーが知るために十分であるか
 - ⇒メアリーはXが道徳性の求めるものか悩むことができるだろう
- ◎ メアリーは感情無しには道徳的概念を正しく習得できないだろう

Mooreの論法とJacksonの知識論法

- ◎ G.E.Moore(1903)のオープン・クエッション論法
 - いかなる自然的性質Pについても、Pを所有することが良いかどうかについてはオープン・クエッション
- ◎ ∴自然的性質P ≠ 道徳的性質

- ◎ Frank Jacksonの知識論法
 - 白黒の部屋で色経験を持たずに育つ
 - 視覚に関わる全ての知識を学習する
- ◎ ∴色のクオリア ≠ 物理的存在者

- ◎ これらの議論は形而上学的結論を引き出したのが間違い
⇒ 認識論的帰結(例えばPの概念と善の概念は異なる)はいえる

道徳版メアリーの帰結

- ◎ 道徳版メアリーも認識論的帰結を引き出す：
 - 規範倫理学における概念は善や悪の概念と異なる
- ◎ しかし、規範倫理学が形而上学的に正しいということは可能である(第3章、第4章で不適切であることを示す)
 - もしそれらが正しいとしたらア・ポステリオリな発見となる
- ◎ 積極的な主張：メアリーが共感能力を獲得すると、クエッションが閉じられるだろう⇒通常の道徳的概念は概念的に感情と結びついている

さらなる反論

- ▶ 道徳的概念と感情との間のつながりはオープンクエスションではないか
 - 例：盗人に怒りを感じるが、その怒りが本当に正しいか迷う
- ▶ ⇒ 意義と意味の違い。道徳概念が何を指示しているかの問題で、それらの意義の問題ではない

1.2.6 サイコパス

- ▶ 現実世界のモラル版メアリー: サイコパス
 - 道徳判断を通常の方法でなすには感情が必要ということの経験的証拠
- ▶ 動機の内在本義と外在本義の対立:
- ▶ amoralist: 行動へ動機づけられなくても、道徳的判断を下せる人物
- ▶ サイコパスは現実世界のamoralistではないか

サイコパスとはどのような人か

- ◎ サイコパスの特徴：
 - ◎ 知的能力は十分にもっている
 - ◎ 道徳的価値を理解しているが、それらに無関心
 - ◎ 慢性的に反社会的行動に走る
- ◎ 暴力に関連する言葉を聞いても通常的感情的反応を欠いており、また共感、罪の意識、良心の呵責も欠いている
- ◎ サイコパスは現実のamoralistのように見える
- ◎ ⇒しかし、サイコパスは道徳を本当には理解していない

サイコパスは道徳的ルールを理解していない

- ▶ サイコパスは道徳的ルールと規約的ルールの区別ができない(Blair, 1995)
 - サイコパスに道徳的、道徳的でないルール違反を見せて深刻さ、権威に対する依存性、正当化をたずねた
 - どちらにも同じように権威に依存すると答えた
 - サイコパスは道徳的な間違いを単なる規約的な間違いだとみなしている
- 道徳の理解における欠陥は感情の欠陥の直接の帰結

VIM、BIS仮説

- ◎ VIM(暴力抑制機構):他人の苦痛を自分のものとして感じることによって暴力行為が抑制される
 - この他者の苦痛を察知する機構を欠いているので、サイコパスは道徳概念を身につけることができない
 - 反論:
 - 暴力以外の行為もサイコパスは行う(サイコパスチェックリスト、DSM-IV)
 - サイコパスの認知能力における欠陥を説明していない
 - サイコパスは道徳感情以外の感情にも欠陥がある
- ◎ BIS(行動抑制システム)仮説:より広範で原始的な情動的システムに欠陥がある(Fowles, 1980)
- ◎ 道徳的な遅滞が感情的な遅滞によってもたらされているという点については同意

形而上学的な示唆

- ▶ サイコパスは感情によらずに善悪の区別ができるとしたら、サイコパスもこれを学べるはずである
- ▶ ⇒しかし、彼らは善悪の区別を学ぶことができない
- ▶ 形而上学的示唆：正しさや正しくなさは感情によって構成されているかもしれない

1.2.7 道徳の不統一性

- ◎ 道徳的性質を特徴づける方法に心から独立した方法がないことを示すことで、形而上学的感情主義を支持する
- ◎ ここでは一見して道徳的性質がわれわれに感情を引き起こすことによって定義されているようだということを示す
- ◎ 道徳的な振る舞いが、適切な感情を引き起こすという点以外では統一性を欠いているということを示す
- ◎ ⇒ 拳証責任を感情主義の反対者に移す

道徳の不統一性

- ◎ 悪のケースにしぼる
- ◎ これらはみな有害であるといえるか？⇒いえない
- ◎ ①有害の概念自体、感情依存的である
- ◎ ②ある種の有害なものは道徳的に悪いと考えられていない
- ◎ ③道徳的に非難されるものの中には害を引き起こさないものがある
 - 例) 被害者無き犯罪
- ◎ 悪に共通する明白な内在的性質はない
- ◎ ⇒悪は我々の感情的反応に、もっと関わっているのかもしれない

1.2.8 感情主義の概要

- ◎ 感情主義は、哲学的直観と経験科学的成果（実験心理学、神経科学、発達科学、病理心理学）からの支持を受けており、
- ◎ これらのデータを最もよく説明する、反証可能な（経験的）理論である
- ◎ 認識論的感情主義：道徳的概念は道徳的反応と結びついている
- ◎ 感情の助けなしに道徳的性質を見出せるという証拠はない
- ◎ 我々の反応以外に道徳的性質の間に共通する性質はない
- ◎ ⇒ 形而上学的感情主義の擁護